



2007/08 WEEKLY BULLETIN

国際ロータリー第 2790 地区第 3 分区 B

市原ロータリークラブ会報

第 2 1 3 6 回例会 2007 年 9 月 19 日 (水) SAA / 川島会員 会報担当 / 宇都宮会員

例会場 五井グランドホテル 市原市五井 5584 - 1 事務局 TEL 0438-38-3535



点 鐘 市原 RC 会長 藤谷泰弘 (一日会長)

ソング 手に手つないで 四つのテスト唱和

お客様 なし

会長挨拶 藤谷泰弘 (一日会長)



今日は代理でございます。空振しないよう点鐘します。角谷会長所用のため代役を仰せつかりました。本日のメインプログラムは齊藤 P G の卓話でございます。大先輩のお話をメインプログラムとする企画が大成功を収め続けております。今週も、来週も、再来週もでございます。どうぞ、お聞き逃しなさいませぬよう出席をしてください。時間ももったいないですから、これで終わります。

幹事報告 幹事 斎藤栄志

- ・ 囲碁全国大会の案内について。
- ・ 地区大会への出席者について別途ご相談いたします。

卓話 斎藤博会員



「ロータリー」あれこれ

その1 米山梅吉氏と東京クラブについて

日本のロータリーの創始者で、運動の中心人物でありました米山梅吉翁は、慶応四年二月四日に東京芝田村町の武家屋敷で、大和の国高取藩士、和田竹造の三男として生まれました。母は“うた”と申しまして、伊豆三島大社の神官、日比谷氏の娘で、梅吉氏が五歳のとき、

父竹造が死去した為、明治五年には一家は母の実家である三島に身を寄せ、母の手一つで育てられました。

沼津中学校に学ぶが二年で中退、上京して銀座江南学校、次いで青山学院大学の前身の東京英和学校に学びながら、渡米の準備のため福音会英語学校で英会話の指導を受けました。

明治20年懇望されて三島の旧家米山家の養子として入籍、その年の春渡米、オハイオ州ウェスレアン大学で法学を学び、八年間のアメリカ留学の後、明治28年帰国、二年後三井銀行に入社、その後は三井の発展と、一生を共にする訳であります。

米山さんは自分の家計には極めて厳しかったようで「一汁一菜主義」を以てしながら、その収入の殆どを、社会事業に使いました。将来有為の若者が、経済的理由で学業半ばにして挫折しそうな事を知ると、自分の名も告げずに学資援助をしたという例が、幾つか、記録に残っております。

当時三井銀行の子会社が、アメリカのテキサス州ダラスにあり、そこへ九州有田の出身である福島喜三次が社長として赴任しておりまして、友人に誘われて、ダラスのロータリー・クラブの会員でありました。処で大正6年に、日本はアメリカに目賀田男爵を団長とする財政問題調査団を派遣しました。その中に当時三井銀行の重役だった米山梅吉氏も加わっており、福島氏が案内役を務め、そのとき米山氏は、始めてロータリー運動の話聞いた。翌々年福島氏は東京に転勤となりましたが、そのおりダラス・ロータリー・クラブは彼の送別会を開き、その席上、福島氏は日本にもロータリー・クラブを作るとの激励を受けました。1920年(大正9年)1月帰国、この年の3月に国際ロータリー・クラブ連合会の本部から、6月末までに日本にクラブを創立するよう福島氏に委任状が届けられました。そこで福島氏は米山氏に相談、創立準備に取り掛かったのですが、当時日本ではロータリー運

動に対する関心が全くなく、6月末の期限切れとなつてしまった。そこで期限の延長を国際ロータリーに申し入れたところ、国際ロータリーから福島氏宛てに条件付きで申し入れを承認する委任状が届き、福島氏の他に当時のパシフィック・メール汽船会社の横浜支店長William L. Johnstonをクラブ創立の共同特別代表に任命する旨を通知してきました。

こうして米山氏を創立者とし福島氏とジョンストンがこれを助けて創立計画が進み、1920年大正9年10月20日に丸の内の銀行クラブで、実力百万石の実業家24人が集まって東京ロータリー・クラブ創立総会を開催、初代会長米山梅吉氏、そして幹事には福島喜三次氏が就任しました。翌年4月1日国際ロータリーの認証を受けました。登録番号は855号で、これが日本で初めてのロータリー・クラブ創立の出来事であります

ここで考えますに、当初国際ロータリーは、福島喜三次氏がダラスロータリー・クラブの会員だったので、東京ロータリー・クラブの特別代表に福島氏を任命したのです。しかし福島氏は、ロータリークラブのが、第二級の実業人によって構成されていることを熟知しているだけに、日本に適するかどうかが当惑しまして、三井の実力者米山氏にその任を推したのが実情の様です。ありふれた庶民であり、企業規模も、教育程度も中等度の人達が、相互に利用することによってProfitを求め、そのために親睦を課題としているロータリー・クラブの姿を見て、このようなロータリー・クラブを東京に作ったとしても、と言う危惧の念が福島氏を支配したものと思われまます。

しかし米山氏は東京ロータリー・クラブの会員選考にあたり、超一流の人物だけを厳選したのです。今日各クラブで会員増強について「質が量か」の問題が提起されているのはこの辺に起因があるようで、この超一流の人物によって作られたロータリー・クラブは、以来伝統となりまして日本各地に同じパターンで作られ拡大し、今日に続いているわけです。日本のロータリーを内的にも外的にも格調高からしめているものは、米山哲学に負うものが多いわけで、もし米山氏以外のアメリカ直輸入方式でロータリー・クラブを作ったならば、どんなクラブが出来、そしてどんな風に発展していたのでしょうか。案ずる所であります。

こうして出来た東京ロータリー・クラブ。始めは活動も極めて低調で、例会日は毎月一回第二水曜日に開かれ

ておりましたが、奉仕活動もろくに行っていなかった。ところが、大正十二年の関東大震災が起こり、この報が外国に伝わるや国際ロータリーから救済基金として25,000ドル、また世界中の503のクラブから14,944銭の見舞金が届き、会員は社会奉仕及び国際奉仕の何たるかを身をもって理解し、これからロータリーに就いても勉強しまして、諸々の実践活動を行うようになったということのようです

逆上る三ヶ月前、大正10年1月、米山氏の長男東一郎さんが20歳にて肺炎にて急逝、氏は「東一郎」と題する記念の冊子を作り、その序文に「春風常に吹き断えじと信じたる我が一家は、遽(ニワカ)に暗黒の淵に沈めり。児の臨終、骨肉慟哭、その刹那の光景は髣髴として今なお眼前にあり。涙とこしえに乾かず」と記しております。

続いて大正15年、画家志望の次男、駿二さんが21歳で、余りにも慎ましい生活に失望して自殺、氏の生活は一層質素になり逆比例して、社会奉仕に一層の力を尽くしたという事でございます。

「新隠居論」を提唱され、55歳になられるや三井銀行の役員を辞任し、財団法人三井報恩会の理事長となり、延べ10年間の長きにわたって、青森県・西平内村の振興に捧げられました。これを知る人は殆どおりません。(米山梅吉、内山稔著)晩年は全財産を、緑が丘小学校に寄付し、自己犠牲の奉仕に徹したのでございます。

大変厳しい方であったようで、或る例会のとき会長として「今回の例会は祝祭日に当たるので休会にする」と米山氏が通告した所、出席会員から喜びの拍手が湧いた。それを見て、いきなり強い語調で会員の方々をたしなめたと言うことです。又規則にも厳しかったようで、クラブの一業一会員制と言う会員構成を遵守され、東京クラブでは長いこと、職業分類上弁護士は、一人であったそうです。

昭和2年頃の話ですが、米山氏は「最近お若いロータリアンは、ロータリーの本質を理解しておらん。ロータリーの例会は人生の道場である。道場に来るからには、それなりの腹構えをもって参加するのを至当とするのに、冗談を言ったり、私語をしたりするのは何

たる事であるか」と、怒鳴られたロータリアンがおられました。東京クラブの柏原孫左衛門、紙問屋の社長で当時28歳。「ロータリーは親睦だよ、親睦は楽しくやらなければいけないよ」と、冗談をかんらからからとやったらしいんです。これが米山氏の逆鱗に触れて「最近お

若い者はだらしがないっ!」とやった。米山先生はロータリーの親睦は最も程度の高いもの、親睦もって奉仕の心を作る場と心得られておられた訳ですから、これも尤もなこととも思われます。

少々横道にそれますが"奉仕の心"の事を英語に直すと ideal of service と申します。ロータリーの綱領にも「奉仕の理想を鼓吹しかつ育成し・・・」とありまして、奉仕の理想と言う言葉は、ロータリーの基になっております。が、この理想という言葉は、時に誤解を招くもので御座いまして、日本語で理想と言うと、完全な状態、現実には到達する事の出来ない状態と言うように考えられます。従って奉仕の理想とは、遙かなる彼方であって、目標ではあるが達成出来ないものと考えがちであります。そこでこの ideal という語には、観念という意味もあります。「理想」と言う語を「観念」と言う語に置き換えてみますと、物事に関する考え、砕いて言えば「奉仕の気持ち」でございます。何も難しいことではありません。「他人の身になって考えて行動する」のが奉仕でありまして、思いやりの心が奉仕となって現れるので御座います。

話を戻して、怒られた柏原孫左衛門、大変個性の強い人だったようでして"この野郎、米山の馬鹿じ爺。彼は満座の中で恥をかかされた腹いせに、"自分の目の黒いうちに、米山の精神・流儀を、東京クラブの中から悉く抹殺して見せる"と誓うのであります。

もっともこの戦いは最初から勝負が決まっております、なぜなら米山先生はお年寄り、どんなに偉い人でも柏原孫左衛門28歳ですから、28歳と53歳が喧嘩をすると、自然法の摂理によって100%、年寄りが負けるのであります。時を経て柏原孫左衛門もクラブの長老になりまして、彼の指導する無名のロータリアン群により東京クラブは、初期伝統のかなりのをどぶに捨てて、米山先生の残されたものは殆ど消えてしまいました。これは東京ロータリー・クラブ50年のあゆみの中に、米山先生の精神を奨揚する文言は、殆どないであります。日本のロータリーの始祖、戦前の日本のロータリーの大黒柱の米山先生が、こうして弊衣の如く捨てられる。これが歴史の系列の中で起こっているのでございます。

僅かに米山奨学会が残っていますが、これは、戦前米山氏の指導を受けた大連ロータリー・クラブの会員で、日清製油大連支店長の古沢丈作氏が、敗戦と共に東京に戻って来まして、昭和24年に東京クラブの会員になりま

した。昭和27年に会長に選任せられました時に、「自分をロータリアンとして原理的に育て励まし、今日の自分を作ってくれたのは米山梅吉先生である。私を本当の社会人のリーダーに育ててくれたのはロータリー。ロータリーの中で米山先生の指導がなければ、自分は自信をもってこの大ロータリアンになることは出来なかった。6年前に亡くなられた米山先生に対する恩に、何をもってして報いようぞ。」先生は東南アジアから来る留学生に、何呉れとなく私財を投じて面倒を見ておられたので、会長権限を使って、「東南アジアから来る留学生の奨学事業をロータリーの制度の中に組み込んで、東京ロータリー・クラブの中に米山奨学会を作ろう」と提案致しました。会長の提唱は誰も否定することは出来ませんので、昭和28年、東京クラブの中に米山基金が出来ました。ところがこの米山基金の財源は、瞬く間に枯渇する。そして今一つは、クラブ内に横溢する柏原孫左衛門を主とする反米山派の会員が居る訳で、クラブで金を集めるのは如何なものか、と言う意見も出て来ました。議論するうちに、米山基金は全日本のロータリー・クラブの財産だと言うことになりまして、昭和31年全日本のロータリー・クラブの共同事業として、ロータリアンの金贖により運営すると言う形になり、下って昭和42年、財団法人「米山記念奨学会」と言うものが出来たのでございます。

しかし柏原孫左衛門と言う方は、戦中戦後のロータリー運動の一角を照らす大立者でありまして、昭和22年に、日本のロータリー・クラブ群の国際ロータリー復帰を、組織的に推し進めようと言うことになりまして、手島知健氏が復帰協議会会長となり、会計担当であった東京水曜会の柏原孫左衛門が国際ロータリーを説得する一手立てとして、昭和15年に国際ロータリーを離脱した後の日本各地の諸クラブが、現実にはどのような活動をしているかの実態を調べる必要があるということで、当時の劣悪な国鉄の列車に乗り、北は北海道から南は九州に至るまで、各地のクラブの実態を其の目で調べて歩きました。その結果、約半数のクラブが、ロータリーの伝統を墨守していたという事実が明らかになりまして、此の調査報告書が国際ロータリーを動かして、国際ロータリー復帰の糸口になったのであります。この事実を知れば、彼の功績を認めなくては、日本のロータリーの歴史を語ることは出来ないのであります。

昭和3年、日本ロータリーが地区管理の時代に入り、第三代ガバナー・村田省蔵氏は(昭和8~昭和10年)ロータリーの日本化を提唱しました。其の一つに、二宮尊徳の報徳教の教え、これはロータリーの職業奉仕の開発に繋がるもので、日本のロータリアンは「報徳教を学ぶべし」と推奨致しました。京都での第七回地区大会に、ロータリーソングも英語のものはやめて、日本語のロータリーソングを作ろうと言う機運が昭和10年の京都での地区大会で出て参りました。そのときに「奉仕の理想」と言う歌が出来たんでありますが、実はこれの原動力は、遡る5年前、昭和5年に第二回の地区大会に、フランク・マルフォランドFrank Mulholland(1915年のRI会長)が国際ロータリー会長代理でやって来まして、神戸のロータリアンに「ロータリーはあくまで世界のロータリーであって、アメリカのロータリーではない。私は全てがアメリカナイズされるのには反対だ。今英語でロータリーソングが歌はれたが、何ゆえ日本語の歌を歌わないのかと問うたところ、日本語の歌では権威がないと言う事であった。そんな事では困る。私は各国におけるロータリークラブが、それぞれその国の風格、習慣によって行われる事を希望する」と言われたのだそうです。そのことを村田さんは覚えておりまして、自分がガバナーになった時に、それを導入したという事でした。

そこで「奉仕の理想」と言う歌ですが、実は京都クラブのメンバーでありました前田和一郎さんと言う方が地区大会の前年度の12月に村田ガバナーに呼ばれまして、「来年の地区大会に日本語のロータリーソングを唄いたい。貴方に是非、歌詞を作って戴きたい」と告げられました。一応は辞退したものの懇願されて、それではやってみましょうと事になった。骨子は、一番だけにしよう、出来るだけ簡単なものにしようと言うことで、この「奉仕の理想」が出来たのです。

ところがあの中で、前田さんにとっての心残りは"みくにに捧げん我らの生業"の部分なのでございます。戦前京都クラブは真っ二つに割れて、天皇陛下が解散しろと言うんだから解散しようと言う国粋派と、いやロータリーと言うのは国際的な組織であるから、そんなことで解散してはならないと言う国際派、この二派が喧喧諤諤の議論をしまして、例会も別々に開いたのだそうです。前田さんは、そのときの国際派の旗頭でありまして、彼の原作詞は"みくにに捧げん"ではなくて"世界に捧げん"だったのであります。処が村田ガバナーが"みくにに捧げん"

に変えてしまった。当時激しかった軍部の弾圧を避ける為の、一つの方法だったのだらうと思いますが・・・。

そのことが分かったのは、昭和40年頃の話で、或るロータリアンが"みくにに捧げん"はおかしいのではと問い出した。これを聞いて川崎クラブの末長久さんが、前田さんの甥に当たる武田好弘(よしひろ)さんが兵庫県に居られることが分かりましたので、「前田さんの真意を聞きたいのでお目にかかりたいのだが、取り次いでくれなにか」と武田さんに依頼しました。そうすると暫くして前田さんから直接末長さんに手紙が来た。原稿用紙400字ずめで四枚に記されていたそうで、「自分は戦後はロータリーに戻ることはなく過ごしている。なぜなら、あの解散直前に国際派と国粋派があんなに論議した仲なのに、戦後は何もなかったような顔をしている。あんな節操の無い連中とは二度と付き合いたくないからだ。」と言って、再びロータリークラブに戻らなかった。結局寝たきり老人になって、「ロータリーの友人もその後は誰も訪ねて来なくなった。そのとき貴方の手紙を戴いて非常に嬉しかった。今は平和になったんだから"みくにに捧げん"これは元の通り"世界に捧げん"に直して欲しい」と書いてあったそうです。末長さんは、何とかしなければとは思いながらも、一(イチ)ロータリアンではどうにも仕様がな。この手紙を受け取った一ヶ月後に、前田さんは、この世を去られた。前田さんの遺言の様にも思うわけで、原作詞者の気持ち、これは"みくに"ではない"世界に"であったと言うことでもあります。

その3・職業奉仕の事

職業奉仕と言う言葉は、1927年に出てまいります。1911年にオレゴン州のポートランドで開かれた第二回全米大会に、アーサー・フレデリック・シェルドンは会議に自ら出席することが出来なかったため、シカゴのロータリアンにメッセージを託し、これが大会で読み上げられました。

「経営の科学とは、奉仕の科学のことを言う。即ち、奉仕に徹するものに最大の利益あり。He Prof its Most Who Serves Best」先に少々解説申し上げますと、He Prof its を1なる数値にする。Servesの世界を1なるものとする。経営者の心の状態が数値で1しかないと考え、心が1であるから自分の行動も1の制約を受けますから、その1なる力でいくらあくせく行動しても、得られる利益は1しか得られない。心の中の質を2に良質化すると、不思議と

1だった行動の主体He Profitsが2になる。そうなる2の思考で会社管理をやった人は、結末として自分の取り分は2とならざるを得ないじゃないか。精神機能というものを根底において、精神機能を良質化することを通じて、その心で実業に勤(いそ)しめば、その精神機能の改善の部分だけ、利潤が上がってくる。こういう考え方なんでしょう。

従って職業奉仕とはどういう事かご理解を戴ける訳で、職業奉仕とは二層構造をもっておりまして、一つは企業管理です。ものを仕入れて売る、それだけでは駄目だ。それをマネージする自分の心を、人間的に浄化して行く。この努力を失うと破滅する事があるぞと云うことでもあります。

シェルドンは続けて「いかなる制度にもあれ事の成否は、一にかかって奉仕の実践者の総和如何による。広い意味において人は皆セールスマン、即ち一人一人が労働か、又は商品であるかの別だけの事で、他者に対して売すべきものを皆持っている。人生の成功は、単なる幸運や偶然性のお陰によるものでなくて、自然の法、即ち、精神的、倫理的、身体的及び高次の精神的法の支配に服するものであって、法の命ずるところに従って行動を行えば、成功をかち得ること必定である。天地の理法森羅万象の背後に、普遍的思想がある事の認識を深くすると言ふことは、人類連帯の自覚、万物帰一、人類皆同胞の自覚の事であって、この次元に立てば、企業の場合であると否とにかかわりなく、奉仕に徹するものに最大の利益ありと言ふ事の本体を会得する事が出来るのである」と読み上げました。

シェルドンのものの考え方というのは、要するに"人間の体の中に魂がある。魂は浄化される事を通じて、人間の行動の質を高めて行く。その行動の中に企業経営が含まれる訳ではありますが、単なる利潤獲得の目的の為に企業経営をしてはならない。魂の浄化によって支えられた範囲内において企業を管理し、相互契約によって金銭が授受される訳であるが、その金銭の中に「浄化された魂の投下」と言ふものがなければならない。金(かね)金に流れる人生には、地獄がある。必ず魂の浄化を企業に移して、企業管理を行うのだ」と言うのであります。

経営者は自分の人格を形成し、企業の経営を奉仕の心で運営することで、更に昇華して道徳基準を高めて行く。そうして職業を通じて社会に奉仕する。職業倫理の高揚、これが、職業奉仕の意味するところでございます。

こういう訳で職業奉仕は単純明快、決して分かりにくいものではないでございます。

「ロータリーが職業倫理をやかましく言うのは分かるが、この競争の激しい経済界で、そんな奇麗事で事業が出来るだろうか」と思われる方もおられると思います。これに対しては「四つのテスト」と言うロータリアンなら誰でも知っている標語がございます。

- 1、真実かどうか
- 2、みんなに公平か
- 3、好意と友情を深めるか
- 4、みんなのためになるかどうか

ここで言うみんなとは、広く社会を指しております。これこそ事業成功の秘訣でありまして、且つ又実証されたものなのでございます。作者はハーバート・テイラーですが、1932年アメリカの経済パニックの中にあつて、或るアルミニウム食器の製造会社が倒産寸前の会社を債権者の依頼を受けて、この会社の再建に取り組むこととなりました。このどん底状態から抜け出すためには、全社員が極めて倫理的な立場をとることと同時に、社長と社員の心が同一になるような管理運営出来れば、この再建はうまく運ぶと考えました。そこで彼は六週間、沈黙考の末編み出したのが、この「四つのテスト」であります。その結果当初6000ドルあった借入金も10年後には全額返済、株主には100ドルの配当も出せるようになりました。

その後1954年テイラーが国際ロータリー会長に就任したとき、職業人の行動規範にもなるものと考え、これを国際ロータリーの標語として版權を委譲しました。これが契機となってロータリーの世界に浸透していったのであります。勿論これは会社経営ばかりでなく、我々の日常生活にも適応されるものでございまして、ロータリー運動の理念が良く盛り込まれているとして、過去40年間奉仕の心を植え付け育てるのに用いられて来ました。がこれは国際大会の承認を得ておりません。あくまでも、個人の提唱するターゲットと同じであります。(1943年RI理事会は採用を決定)そして総てのロータリーの思想と同一であるかどうかと云うことに付いては、いささか問題がございます。ロータリーの一部を示すものであって、全部を示すものではないのであります。如何なる場合に適応するかというと、同一社会の人の和を得る為には非常に良い。同じ性質の社会、例えば会社のように全員が利潤を追求する社会、こういう場合には最も適切であります。しかし異質の社会の人の和を繋げる事は出来ません。

具体的内容に付いて考えますと四つのテストを二つに分けて考える。一つは1、真実かどうか。今一つは2~4であって、1が言動そのものの内容、2~4はその言動が述べられるべき状況に関して、類別する基準が示されています。ロータリアンの言動は必ず真実で無ければならない。真実の上のみ、人と人との信頼関係が成り立つ。しかし真実の言動のうち、これを実行するか否かは、2から4の基準により分類検討を加えた上で行われなくてはならない。即ち1、はロータリアンの言動は真実かどうか。2~4は真実を語ることが、皆の公平になるかどうか。真実を語ることによって、人間関係が損なわれる場合は、真実を語らない方が良くぞという訳です。

例えばここに胃癌の患者さんがおられたと致します。この場合2~4の準則の命ずるところによって、貴方は癌ですよとは言わないでしょう。だがしかし、何も言わない事が相手に不吉な予感を与え「何も教えてくれないようですが、私は癌ではないのですか」と訊ねられたときに、一体どう対応すべきか。「いいえあなたは癌ではありません。ごく普通の病気ですよ」と言えば真実に反することになります。死に赴く人の姿に対して、生者の精神衛生を管理する世界、この世界は異質の世界でありまして、「四つのテスト」によって人の和を作ることとは出来ないのであります。

いま一つ、職業奉仕は、職業を通じて社会に貢献することだと、手続要覧には書いてありますが、言葉だけに飛びつきましては非常に危険であります。例えば弁護士が無料奉仕相談を企画する、医者が無医村に行って診療行為をやる。これは職業を通じて社会奉仕をしている訳ですが、職業奉仕かと言うと、これは実は社会奉仕であります。そこで、職業奉仕と社会奉仕を分ける基準はどこかと申しますと、それは受益者、その奉仕の実践によって利益を受ける人が、ロータリアン以外の人の場合は社会奉仕、ロータリアンが受益者になる場合、これを職業奉仕と言うのであります。もともと職業奉仕と言うのはクラブでいるんな発想を交換して、そこで得たものを自分の企業に持ち帰って企業繁栄の糧とした。と言う事は自分の企業が栄える事ですから、ロータリアン自信が受益者になります。

それからロータリアン以外の世の中の人達が利益になるもの、これが社会奉仕。従ってある一つの事が、職業奉仕になるのか社会奉仕になるのか。その基準は、受益者

は誰かと言うことをいつも考えておけば宜しい訳であります。

そこでクラブで、職業奉仕委員会の事業計画として行われている優良従業員の表彰。これは職業奉仕委員会が企画立案しているクラブが多いのですが、優良従業員と言うのは、ロータリアン以外の人々が表彰を受けて受益者になる訳ですから、これは原理的には社会奉仕委員会が管轄しなければならない。しかしロータリアンの受益は、全然無いかというとそうでもない。例えばある社員が表彰を受けます。そうするとその同僚も奮起する、企業の実績も上がってくる。企業が繁栄すれば受益者となるのはロータリアン自身であります。従って正確に申しますと、優良従業員の表彰と言うのは職業奉仕20%、社会奉仕80%である。それでは社会奉仕委員会が管轄するのは間違っているかと言うと、それはどちらでも宜しいのですが、原理的に頭の中で整理する時には、受益者がロータリアン以外の人ならばそれは社会奉仕、ロータリアン自身が受益者になるのは職業奉仕となるんだ、と言うふうに分けていけば分かり良いと思います。

如何でしたでしょうか、これで本日の話は終わります。

ニコニコボックス

- ・齊藤博会員：拙い話を聞いて頂いて!!
- ・南山治会員：長欠して相済みませんでした。お蔭様で体の中のいらぬものを取除いて今は気分“そうかい”です。
- ・藤谷泰弘：1日会長無事終了ですといいましても点鐘2回が仕事でした。

出席報告

前々回確定 77,8%	本日出席者 34 名
本日欠席者 11 名	本日出席率 76%